

NETT

North East Think Tank of Japan

No.16

1996.9



特集

21世紀のほくとう日本
～ほくとう総研及び北東公庫の役割～



ほくとう総研

NETT

CONTENTS

No.16

1996.9

1 ●羅針盤◆“理工系離れ”という言葉について思うこと
北海道工業大学学長 有江 幹男

●特集●

21世紀のほくとう日本

◆ほくとう総研及び北東公庫の役割

(財)北海道東北地域経済総合研究所懇話会から …… 3

開催日：平成8年8月1日(木)

開催場所：経団連会館「阿蘇の間」

出席者：下河辺 淳 (東京海上研究所理事長)

伊藤 善市 (帝京大学経済学部教授)

原 司郎 (高千穂商科大学学長)

新飯田 宏 (放送大学教授)

窪田 弘 (ほくとう総研理事長)

オブザーバー：宍倉 宗夫 (北海道東北開発公庫総裁)

竹内 透 (北海道東北開発公庫副総裁)

司会：高田 喜義 (ほくとう総研専務理事)

14 ●連載◆ほくとう日本のひとびと/13
宮沢賢治～イーハトーブをこよなく愛した詩人
ほくとう総研 理事長 窪田 弘

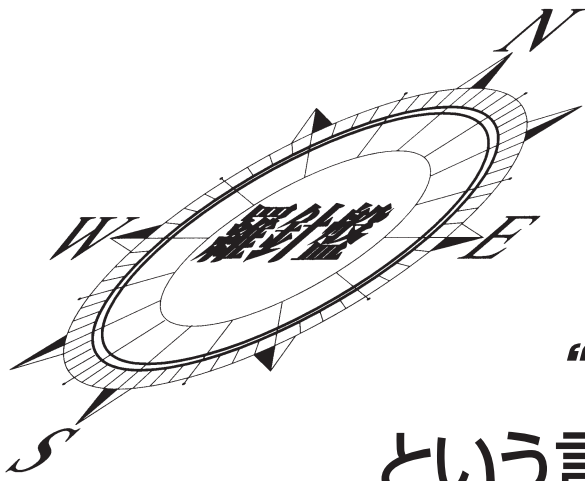
●コラム◆リレーエッセイ◆ 17

新潟三菱自動車販売(株)代表取締役 与田 一憲

18 ●連載◆地域づくり/5
夏の観光王国のイメージチェンジ作戦～北海道壮瞥町
ほくとう総研 専務理事 高田 喜義

●ほくとう総研のページ 20

事務局から・ほくとうDIARY・編集後記



“理工系離れ” という言葉について思うこと

北海道工業大学学長 有江幹男

言葉は社会の中で人と共存しているのであるから、世代が代われれば言葉も変化する可能性のあることは否めない。時代を反映して時に新生語が作られ、流行語が生まれて消える所以とも云えよう。“若い人の理工系離れ”という語が耳に達して久しいが昔聞いた覚えがないので、流行語で死語となるのか新生語として残るのかは将来でないと判らない。また、わが国では高齢化が進み長寿の先進地域北欧を凌いだことが報道されているが戦後50年ともなると、あの空しき戦争の時代を身を以て体験した人の数は減少の一途を辿るのが宿命であることも論をまたない。しかし、敗戦のどん底から立ち直ってわが国における現代の繁栄をもたらしたのは、一にかかって積み重ねられた善良な国民の努力と、正否は別として兎角独創性を欠如しているといわれる科学技術の寄与であることを肯定する人の数は減っている筈がない。何となれば、付加価値の追求以外に方途のない立地条件、即ち乏しい資源に糧を求めなければならないということには、厳しさこそ増大したものの今も昔と何ら変わってはいないからである。物質的豊かさに相応しい人文科学の裏付けの発展を欠いた社会の幼稚さが漸くにしてその欠点を露呈しているかに概観される現代、理工系離れの世情が続いて、次代を負うべき若い新鮮な頭脳の流入に遅れをとるようでは、わが国の将来に不透明の度が加わるに違いない。

例えば、音楽を志す場合には楽譜を共通語とする社会に入らなければならない、絵画の才あれば色彩と形を抽象化する感性の世界で技量を磨かなければならないのと同様に、理工系の分野で生きるためには少なくとも物理量を取り扱う単位について、日常生きている実社会とは別の世界に身を置くことが求められる。もしもこの煩雑さが理由で理工系離れの世情が増幅されているとしたら、文明開化の明治維新以来先人達の歩んできた途に背を向けるに等しいことで、これからのテンポの速い世界の進展の中での存在が怪しまれよう。

通貨の単位は厘、銭、円で葉書が一銭五厘の時があったし目方は匁、貫で測られ、長さは分、寸、尺、間、町、里などであり、面積が坪、畝、段、町歩、容積には勺、合、升などが慣用されていた時代を抜けて、目方にはグラム、長さはメートル、面積は平方メートル、容積はリットルなどを常用する社会に移行した時、1貫目=3.75kg、1尺≒30.3cm、面積は1坪≒3.3m²、容積については1升≒1.8ℓなどを基に不便さを克服していた時代があったことは我々の世代の淡い記憶に残っている。

理工系特に力学を志す場合、物の目方即ちその物に作用する重力という力と、その物の質量とを判然と区別する頭の切り換えを避けることはできない。力 = (質量) × (加速度) というNewtonの法則で、力と加速度の方向は一致していなければならないことは当然のことで、この関係を物の目方に適用すれば加速度は地球の重力の加速度 9.8m/sec^2 であるから、少なくとも数値の上では (目方) = $9.8 \times (\text{質量})$ ということになるが、紛らわしいことに目方にも質量にもkgという同じ単位が使われており、目方は我々の日常生活において秤をもってkgを単位として測られるのに、質量は直接には測れない物理量であって力学の世界で通用するkgを単位としているのである。このことに習熟している者にとって、もう一度乗り越えなければならないのは国際単位 (International System of Units) S I の観念に慣れるということである。再び力を例にして述べてみると力の単位にはNewton、質量の単位にはkgを用いて質量と重量を別々の単位で表わすことである。前述のNewtonの式により右辺の質量を1kgとすれば、(加速度) = 9.8m/sec^2 であるから左辺に相当する重量は 9.8Newton であると規定するのである。このようにすれば、例えば

$$\begin{aligned} \text{動力：1馬力} &= 75\text{kgm/sec} \quad (\text{但しこの時のkgは力}) \\ &= 75 \times 9.8\text{Newton} \cdot \text{m/sec} \\ &= 735.5\text{Joule/sec} = 735.5\text{watt} \end{aligned}$$

(注) $75 \times 9.8 = 735$ となるが、重力の加速度を 9.806 として 735.5 の数としてある。

となり日頃使われているワットが定義されて電気エネルギーへの門戸が開かれる。旁々純水1gを標準大気圧の下で 14.5°C から 15.5°C まで昇温するための熱量1calの実験値は 4.186Joule であり、1馬力の動力が1時間即ち3600秒で果たせる仕事量あるいはエネルギーは

$$735.5(\text{Joule/sec}) \times 3600\text{sec} = 2.647 \times 10^6 \text{Joule} = (2.647 \times 10^6 / 4.186) \text{cal} \doteq 632.5\text{Kcal}$$

として熱量とエネルギーの関係が得られる。

エネルギー源の確保、自然環境の保全是現代における重要課題の一つであるが、エネルギーとは何であるかを皆が知っているか否かは疑わしい。徒らに口先のみを駆使するような知識人も少しは動力学のことを理解し、さらにはこの知識を駆使する畑に身をおいて貢献の実を挙げる若者を育てることに意を致さなければならないということである。

ほくとう総研及び北東公庫の役割

◆(財)北海道東北地域経済総合研究所懇話会から……

開催日：平成8年8月1日(木)

開催場所：経団連会館「阿蘇の間」

出席者：下河辺 淳(東京海上研究所理事長)

伊藤 善市(帝京大学経済学部教授)

原 司郎(高千穂商科大学学長)

新飯田 宏(放送大学教授)

窪田 弘(ほくとう総研理事長)

オブザーバー：宍倉 宗夫(北海道東北開発公庫総裁)

竹内 透(北海道東北開発公庫副総裁)

〈司会〉高田 喜義(ほくとう総研専務理事)

司会(高田) お陰様でほくとう総研ができましたから4年経ちました。この間、大きく事業を分けまして自主研究事業と情報提供事業とそれから受託事業を3本の柱にやって参りました。また、シンポジウムの開催、海外視察なども実施して参りました。

さて、きょうお話しいただきたいのは大きく分けて3つ、1つは、21世紀型の国土開発の中における北海道・東北地域、ほくとう日本の役割はどういうことかということ、そのなかでほくとう総研、北東公庫の役割はどうなるのかということ、2つ目には、次の全総の骨格というのは、どんなものになるのか、更にはホットな話題としての「首都機能移転」といった点についてお話をいただければと思います。

まずは、下河辺先生に口火を切っていただこうと思います。よろしく願います。

「20世紀型の開発と ほくとう日本の現状について」

下河辺 まず、20世紀は東京・名古屋から北九州に至る太平洋ベルト地帯の開発という、西日本国土軸で日本全体をリードしてきたといえます。だけどそれは、明らかに20世紀文明のもとでできたという訳であって、それを遅れた地域に、国土軸を3本追いかける形で作ってゆくというのでは、あまり意味がないと思うのです。全然異質なものとして、新し

い国土軸を意味づけて欲しい～大きくいえば、20世紀文明と21世紀文明の何が違うかというあたりに、少し明解さがあると面白いのですが。

具体的にいうと、県レベルでは、依然として新幹線と高速道路の陳情しかないのです。新幹線と高速道路をわれわれが必死にやったのは、東京-大阪という巨大経済圏を結ぶ手段として開発した技術であって、それが今後の日本の全体に当てはまる技術じゃなんか全然ないのです。

ですから、例えば日本海国土軸のテーマは何か、しかも、交通の手段は21世紀型の交通システムを新たに開発するテーマだということまで言い出すものですから、20世紀の新幹線で、辺境の地の交通手段にしようなんてとんでもないと、赤字が確実に保証



下河辺 淳 氏 (東京海上研究所理事長)

されている仕事をやる必要はないよと言わざるをえません。それでいて交通は要るわけですから、交通量は極く小さいという前提で新しい交通手段の技術開発を行わないとダメなんです。

そのあたりが気になっているのと、ほくとう地域での産業構造は全然みえてないのです。重厚長大から資源型というような歴史だけが残ってしまっていて、21世紀のほくとう地域の産業は、無理矢理いわれどマルチメディアとバイオテクノロジーといった具合になるのです。それじゃ、ちょっと、……という議論をし直している間に、私なんかは、東北の産業って、やはりもう一度農業じゃないかということさえ言い出しているんです。20世紀型の農業ではないという、新しい農業を議論する機会にならないかなどと考えているところです。

司会 20世紀型といいますか、戦後、地方から出てきた議論は、格差の是正の問題だと思いますが、経済にせよ所得にせよ明らかに格差というのはずいぶん縮まってきていますね。

下河辺 いや、高度成長だから格差の拡大を恐れたという政策がテーマとして成り立ったのですが、全体が低速経済になったときに、地域格差は地域問題ではなく、それぞれの地域の特色のある産業構造論を展開すべきだという気がします。ですから、ほくとう総研も北東公庫もそういった点に重点を置いた方策を採っていくべきではないかと思います。

「21世紀のほくとう日本と ほくとう総研、北東公庫の役割」

伊藤（善） 私はやはり21世紀型ということをあえて取りあげている知事さん方に近い考え方の方ですね。これまでの開発は、ある時期においては、非常に有効であったけれども、現在、既にそれだけではまずいということがわかってきたし、さらに21世紀を展望してみると、いろいろな問題があると予想されます。あえていえば一つは開発と環境をいかに



伊藤 善市 氏（帝京大学経済学部教授）

両立させるかということが、21世紀の最大の問題の一つだと思うのです。

ですから、ほくとう日本では、いま、リサイクル問題をはじめとして、そういった環境問題を産業化するとかたちで、芽が出始めているのですね。これは、地球的規模で大問題ですから、そういう面での先進的な狙いを先取りした研究なり、あるいは実験なりをやるべきだと思います。

確かに、「開発すれば、すぐ環境破壊だ、経済成長というものはろくなことはない」という説が一昔前にあったわけですが、開発をしながら新しい環境をつくっていくということだって可能です、現にそういうことで成功している所もあるわけです。

例えば、ドイツでは、政府が予め植生については学者を動員して、随分早い時期に植生の調査を全国的に行い、将来の展望についての合意が出来上がっていて、ここにはこういう樹種を植えると決まっているわけです。かつて、ルール地方の石炭の露天堀を見に行ったときにそのことをうかがいました。ここには木を植える、ここは芝生にする、ここには人工の湖をつくって子どもの遊び場をつくるという風に決めて、その通りやるわけです。これは30年前に掘って植えた所だ、ここが20年前です、ここが10年前ですというように、そこには立派な森ができつつあ

るわけです。砂利を採取する場合もそうしたルールは定着しておりますから、開発をすればするほど望ましい環境というものができていくわけです。

そうして掘った石炭の価格には、自然復元のコストがオンされているわけで、石炭などの価格には、復元等コストを含めると考えるのが常識となっているのです。日本でもゴミ処理や自然復元等コストについて真剣に考えていかないといけないのではないかと思います。

そうすれば、開発即環境破壊だとか、経済成長はマイナスの影響を与えとかいうふうにはならないわけです。例えばGNPの実態を考えましても、GNPの成長によってえられた経済の余剰を活かして再配分し直す。環境が悪化しないような新しし配分の仕組みを、未来を先取りしたかたちの新しい再配分を考えてゆく必要があると思います。その中に、ほくとう総研や北東公庫が貢献できる分野があるのではないのでしょうか。

もう一つは、これも世界的規模の話になりますけれども、やはり人口問題だと思うのですね。21世紀の半ばになる前に、中国の人口は15億人に、そしてインドも15億人になるだろうといわれていますね。ですから、食糧と人口とのバランスを、総合的に研究するという課題は依然として残りますし、新しいかたちでも出てくるでしょう。それから先ほどの環境の問題からいえば、アフリカなどの人口の把握は難しいのですが、人口が爆発的に増えることだけはまず間違いないだろうとみられています。

一方、発展途上国でも人口は減らない。なぜ減らないかという、子どもは水を運んだり、薪を集めるという「貴重な労働力」とみられているからなんです。日常の生活は薪がなければ食べていけませんから、これが大問題になっているわけです。それから、年を取ったら子どもに面倒を見てもらえるのだから、子どもはたくさんいたほうがいいんだという意識も依然として働いていると思うのです。

また、先進国側は1人当たりの生活水準は高いわけですから、エネルギーでも資源でも、相応の責任があると思います。

日本の経済が大転換の時代を迎えたといわれますけれども、第二次産業の生産性はイノベーションのために非常に上がり国際的なレベルになったと思うのです。ただ環境問題についての配慮が足りなかった面もある。ところが一次と三次は、まだまだ生産性は低いのです。ここで発想を転換すれば、一次産業も、もっと違ったかたちで生産性の高い、そこで働く人々が胸を張ってやれるようなかたちにもっていくことは十分可能だと思うのです。

三次産業は、流通関係も入り一番シェアは大きいものだけでも、現在の段階では生産性が低いので、それを引き上げるためには、ほくとう総研あるいは北東公庫が果たすべき役割は十分あると思うのです。

原(司) 私など、外から見ておりまして、ほくとう総研も北東公庫も、北海道東北地域の観光産業にかなり重点を置いた事業を展開されてきているのかな、ここ数十年観光資源の開発に重点を置かれていることでは変わっていないのではないかと思います。しかし、どんなに観光資源の開発が行われても、人口がある程度増加していかない限りあまり意味がないのではないかと思います。例えば函館にイカ専



原 司郎 氏 (高千穂商科大学学長)

門の水族館をつくり、小樽に何かの博物館をつくり、といったって、みんな、札幌市の人を対象にして、そういった観光施設をつくるということになるわけなので、人口そのものももっと集まるような、そういう経済構造にしていかなければならないのではないかというふうに思いますね。

そのためには、やはり思い切って、1つは観光産業から脱却されるというイメージを21世紀に描かれたらどうかと思います。

先ほどから、両先生のお話にもありましたように、やはり21世紀、ほくとう日本の産業構造はどうあるべきかということについて、なかなかみえてこない現状ですけれども、そのためにこそ、たとえば将来の産業構造のあり方みたいなものを描く意味でも、技術情報の開発・提供が、ほくとう総研や北東公庫に課されている重要な課題ではないかと思えますね。

先般も、私用で北海道（道東と道央）を旅行する機会がありました。その感想なんです、例えば知床半島の景色ひとつとっても、オーストラリアなどよりはるかにスケールが小さいという率直な印象でして、そういうもので北海道が食べられる時代というのは、もう過ぎたのではないかと。

観光産業ということを中心に置いたら、結局、先ほどのお話のように交通手段をいかに密にして、しかもいかにコストを下げるかということが重要になると思いますが、今やそういう時代ではなくて、北海道自体何か特色をもった地域に、つまりは、ほくとうの地域に、何か個性を持った産業構造というものを考えていかなければならないと思うのです。

私は、旅行が好きで、例えば山形市農協のご紹介で山形市近郊の農家を見たことがございました。その農家の方は非常に意欲的で、農協の技術指導ではなくて、自らの技術開発で野菜のナスを木にしてみました。そうすると、野菜だと毎年連作はできないけれど、木の場合には毎年なるということで、大変な技術開発をしたわけです。「どなたの情報でこう



新飯田 宏 氏（放送大学教授）

いう技術開発ができたのですか？」と聞きましたら、「全て自分でやりました」と。

畜産業などでも、ある地方の畜産農家ですばらしい畜舎を建てて、規模の経済性が発揮できるのを見に行ったりしたんですが、大部分の地域産業の開発が、おんぶに抱っこという形で行われているというふうに思える中で、山形ではそんなことはなくて、自分たちの知恵で、やはり規模をある程度大きくして生産性が上がるというようなかたちで技術開発をしておられるという意欲旺盛な、技術開発にも熱心な農家をいくつか見ております。

そういう意味で、国や地方公共団体が指導するという意味ではなくて、もっと農家なり中小企業者の意欲が出てくるような、そして、それを支援するような技術情報の提供をしていくことが大切だと思います。

では、例えば、流行りの半導体産業などが、なぜ北海道地域に集積しないのか？また、女満別^{めまんべつ}の空港の周辺なんか一面原野でして、水もあるし、人を呼べば住むところはあるわけですから、そこを冬には温めるとか、そこで稼げる新しい産業を育成することも、開発を考える要素の一つになるのかなという気がします。いずれにしろ、ほくとう総研あるいは北東公庫の使命としては、自助努力によって地

域の産業が十分伸びるような技術情報を中心とした産業情報の提供をおやりになることだと思います。

新飯田 私自身は、北海道・東北のことをよく知っているとはいえないのですけれども、ほくとう地域の企業をどういうふうに理解するかというと、まず、産業構造の転換、国際化、企業経営のグローバルイゼーションということを前提にして考えてゆく必要があると思います。一言でいいますと、世界経済も日本経済も大きな転換期にきているということだと思います。

そこでの主要な問題は何かというと、世界的な競争が進行する以上は、どの地域あるいは国でも、その地域の特色を出す、産業組織論的にいいますと、製品の差別化が成功するかどうかというのがポイントだろうと思う。差別化が行われるためには、同じことをやっていたはいけないわけですから、何らかのかたちで、天然の比較優位を生かすという問題と、もう一つは、政策的に差別化を作り出すという問題になると思います。後者の問題が求められている開発戦略の議論になるのではないかと思います。

そのような観点から、北海道・東北をどう考えるかですが、極く簡略化していえば、これまでに新幹線、高速道路に代表されるような、どちらかというところ、日本経済全体の均一的な平等化開発の政策はある程度達成された。それから同時に、標準的な公共財の供給も日本全国に広がったと思うのです。しかし、それはもう限界にきているわけで、いま問われているのは、地域独自の差別化の問題です。

ご紹介しておきますと、アメリカにおける企業立地の話からの一つの例なんです。ある企業がニューイングランドのどこの州に工場を設置するかというときに、調査機関が検討した重要な要因の一つは、法人税率の高さでした。法人税率によって企業のえる利潤は大いに異なるからです。結局、所得税を全くとらないニューハンプシャーが法人税の高いバーモントより良い立地条件だということでした。

これまで各地域は企業誘致に一生懸命努力してきましたが、一時的で長期的展望を欠く誘致策では企業は簡単には進出しません。重要なのは企業自身が立地を選択したくなるような「地域の魅力」というものが大事だということでしょう。いわば各地域の特長を生かした税収構造が企業立地に影響を与えるのです。これこそ基本的な差別化の一例です。

そうした地域の魅力というのは、一朝一夕にできあがるものではありません。有名なトライアングラー・リサーチ・パークというノースカロライナ州にある研究学園地域には、全米のクレジットカードのほとんどを発行している企業や世界的に著名な製薬会社などが多数参集していますが、この地域ができあがるまでには1960年代の初期から知事はじめ州を挙げての10年に及ぶ地道な宣伝活動が必要だったようです。ノース・カロライナ大学などの3つの大学を三角形の頂点にして囲まれた、この壮大な構想計画も全米に情報として知らせ、企業に参加してもらうにはそれだけのコストが必要だったのです。

いずれにしても、他の地域とは質的に異なる有効な差別化が「ほくとう地域」にできるような環境を作ることが大切であって、先見的に、観光産業はダメであるとか、特定の産業構造でなければならないというような議論には賛成しかねます。

ですから、ほくとう総研も北東公庫も、地域開発



金融という狭いジャンルではなく、ほくとう地域の差別化という意味での適確な情報提供をしてゆくことが大切だと思います。例えば昨今の規制緩和という流れがあるわけですから、その規制が無くなった場合には各産業はこういう風になるといような形での調査なども面白いと思います。

「21世紀の生活はどうなるのか ～例えば文化などについて」

窪田 人間の暮らしというのは一体どうなるのか今一つ鮮明じゃない。やはりわれわれの暮らしというのは、一体どうなるかということから考えていかないとわからないような気がするのです。そこがどうもよくわからないのですけどね。

例えば、便利な東京や大都市に人間が集まって、その代わり田舎へ行きたい人は行けるといふうになるのか、日本全国どこにいても同じレベルの所得獲得のチャンスがあるような社会が望ましいのか、どういう暮らしの姿になるのか、それもあまりよくわからないですけどね（笑）。今後の地域開発というものが、いわれるわりにはどうも、はっきりしたイメージがわからないと思います。

下河辺 私たちが地域開発をやった当時は、地域医療ということを徹底的に厚生省に申し上げた時期



窪田 弘（ほくとう総研理事長）

があるわけです。そのころの厚生省の医療というのは、国立病院とか私立病院とか診療所という疾患別医療だったんです。それを地域医療にまとめてもらわないと、地域の発展に問題があるということを書いて、問題にした時期があるんです。

診療所の動きなんていうのは、おもしろいテーマだそうです。例えば、現在は、厚生省が完全に地域医療体制に切り替えちゃったんです。そのために、厚生省の行政が、全部地域型になり始めたわけです。しかし、膵臓癌とか難しい病気になったら、東京へこなきやダメじゃないかとかいうことなんです。

だから、ハイテクが進んだ高度の医療体制というのは、地域主義ではダメになってきたのです。地域でできるだけ充足しようというのが医療体制ではあまり適切ではないという議論があって、どういう医療体制がいいかを議論して欲しいという。これは、実は、今度の地震対策の中で、厚生省は完全に地域医療制度ということで対応してくださったんです。地元医師会とも相談をしながら、住民のための医療サービスをしておりました。

ですから、教育についても、医療についても、いろいろな面で、われわれがいままでやってきた地域主義は、果たしてそのままいいかどうかという議論なんです。いつでも、だれでも、どこでも、というのをコンピュータリゼーションで全国画一にするほうが正解かもしれないという、これは、雇用の問題から医療から教育から、全部地域主義というのは、果たして是か非かということまで、今度の計画では議論しないとイケないかなあと思うのです。

そのことは、逆に言うと、三全総以来やってきているナショナルミニマムとかシビルミニマムという思想それ自体を否定することになるかもしれないということで大変なんです。弱者救済に関心が集まった日本人ですから、そういう発想に馴染むのが大変なのに、個人、個人の生活は全部そうだったんです。

そういうあたりがこれから議論として、地域問題

というのは複雑になるのではないのでしょうか。そのとき、美術館も図書館も歌舞伎座も、全部東京主義で、国立の文化施設は全部東京にあるというのでは、地方は何だったんだとなってきますが、地域主義を離れて、脱皮する文化施設論というのが出てくるわけです。

そこで、われわれは、東京の文化施設は倉庫であって、活動は地方だということを、裏返しに言うと、東北の小さな町で、美術や芸術のセンターができてくる可能性が高くなったと言い出して、地域性を越えた文化というものの拠点性という議論をするようになってきました。

そうすると、図書館とか、市民会館は住民のためという時代ではなさそうなんです。世界中の人のために田舎の町に美術館ができるというような発想にさえなっちゃうというあたりで、地域主義という発想が少し実態が変わってくるのではないのでしょうか。それは、おもしろくなってきました。

司会 地方の文化施設も最近は随分変わってきたようですね。

下河辺 宮崎の「県立芸術劇場」というのは、サントリーホールよりも音響効果がいいんです。だから、国際的なプレーヤーの話題なんです。ここで演奏したいという希望のほうが多くて、劇場が成り立たないというのを心配するわけです。そこで、県を挙げてバックアップして、この間、アイザック・スターンを呼んで、N響のレッスンの会場に貸したんです。そしてお土産に演奏会を開いたら、全国からお客が来て超満員なんです。宮崎でああいうことができる時代になったんです。

絵なんかでも、ルーブルよりも岩手の美術館のイベントの方がレベルが高いということがいわれる時代なんです。それは、大美術館というのは倉庫で、駆け足でプランニングするものだから、その日に何を飾ってあるかもわからない（一同笑い）。それで、岩手なんかでやると、美術館の選んだ数枚の絵を鑑



司会：高田 喜義（ほくとう総研専務理事）

賞する会なんです。そうすると、描いた本人とか評論家とかが来て、レベルの高い美術評論会ができて、それも半日飽かずその絵を見ているというのが美術鑑賞だということなんです。それは、長野や青森もみんな同じです。

それから、北上市にある井上靖さんが提案された「日本現代詩歌文学館」は、あれはやり方ですごくよくなります。世界中が先に注目しちゃって、日本人じゃ知る人が少ないという状態です。それで、市民の中に、サッカーと同じでサポーターができてきましたし、お客さんたちを案内する能力を市民の一部の愛好家たちがもつなんていうのはいいことですよ。

伊藤（善） 21世紀を展望するといろいろな面白いことがでてくるんだから、金融業だって、大きく発想を変えればいいんじゃないかと私も思うんです。

ほくとう銀河プランの中では、学術、技術、芸術のメッカにしようというのがありますが、これからは情報や知識で勝負するのだという意識ができてくるのです。

ですから、そういったことを前向きで考えていけば、おもしろい金融機関になるかもしれません。北東公庫は出資機能を持っているわけですから、それを使えば、先ほどいくつかの例がありました地球的

なレベルの美術館や博物館を育てることもできるわけですし、どういう人材をどういうふうに伸ばしていくかということについても大きな責任を分かち合うべきです。業務内容も、単なる産業振興だけでなく、情報とか知恵も貸しますという風になっていけば、ものすごく魅力のあるものになるだろうと思います。

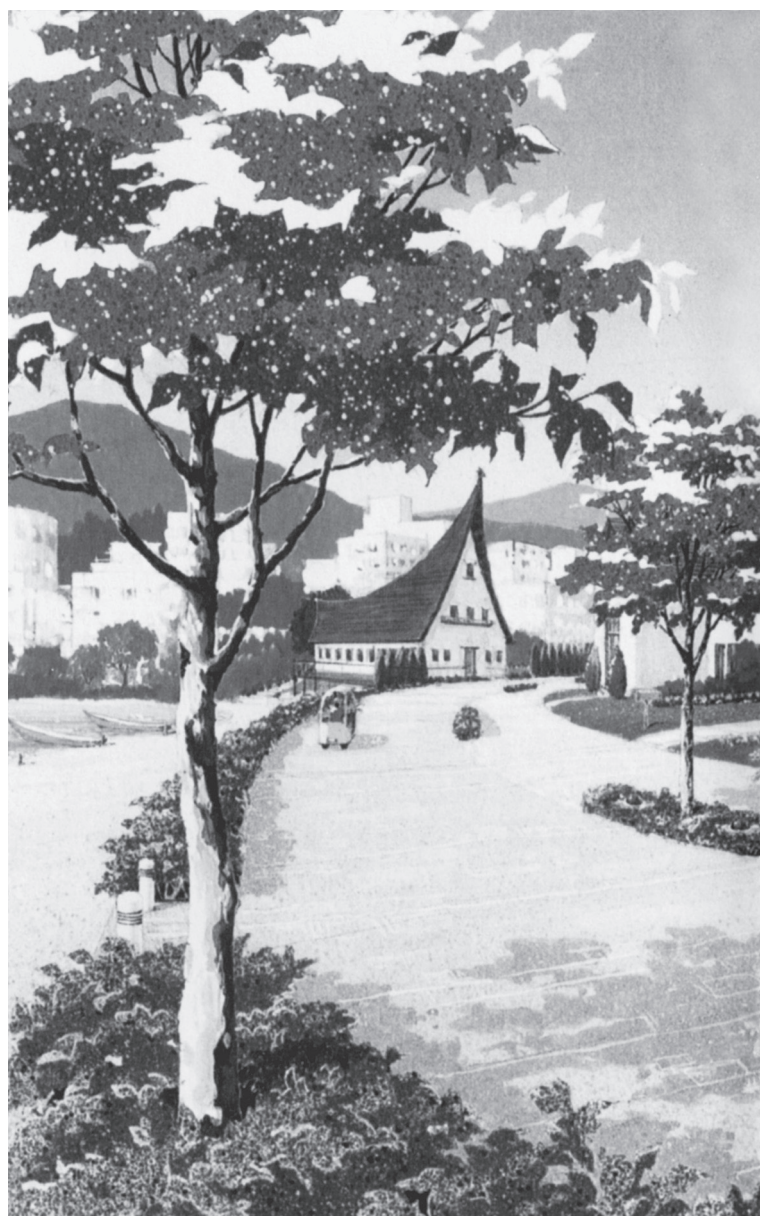
私は、和戦両様という考え方も必要だと思います。明治以降の政府系金融機関というのは、ある時期からやはり民間金融機関に替わってきています。歴史的な役割を果たしたら、今度はもっとより自由な私たちでやりましょうということになったわけですから、民間になっても大丈夫だというようなやり方も頭に入れ、民間でも政府機関でも大丈夫なような両方の準備をしておいたほうがいいと思うんですね。

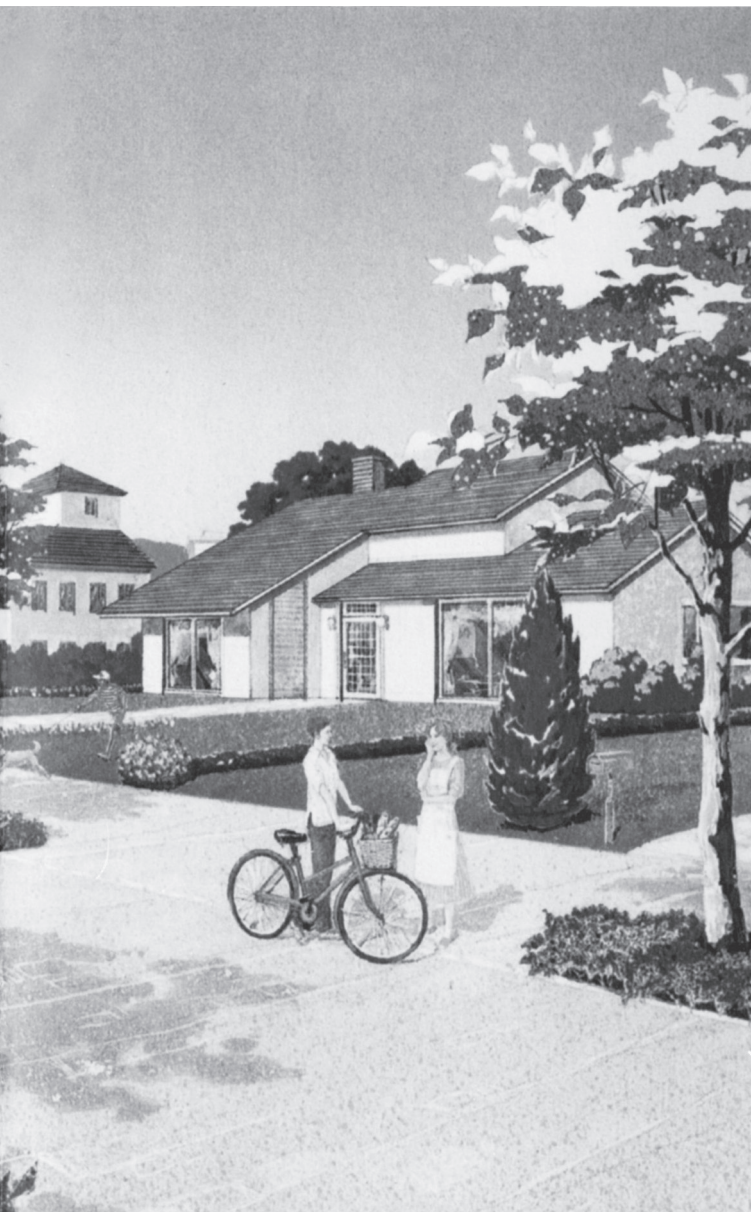
ついでに申し上げますと、ほくとう日本という言葉は、「北東」、「寒い」というイメージが強すぎるのではないかと思います。ところが、この地域はアメリカに一番近いところなんです。ですから、北ばかり向かないで東の方を向いて、あるいは南の方を向けばもっと可能性が高まるわけです。沖縄は日本の一番南だけれども、南端じゃなく、辺境でもないわけで、南の玄関だという言い方をしていますよね。そういう意味では、国際センターとかといって、南方から研修生がきた場合に受け入れられる施設を作ればよいと思います。

ですから、北東公庫がカネを貸すだけじゃなくて、知恵も貸すし、人材についても出します、そういったものの先鞭を付けばもっと親しまれると思いますね。

「首都機能移転問題について」

司会 最後に一言だけおうかがいたいのは、首都機能移転の問題です。今後21世紀には、ほくとう日本にとって、首都機能移転というのは、どのような意味を持つのか、お話しいただけますか。





伊藤（善） 仙台重都構想というのがあり、私もそれを主張しましたがけれど、別に仙台だけにとらわれてはいません（笑）。

日本列島というのは、はじめは北九州あたりから始まったのが人口の重心が順番に東の方へきて、今、岐阜県辺りまできているわけですけども、長期的に見れば、次第に北上してきていますね。だから、第1国土軸というのは、制度疲労を起し始めているんだから、今度はもっと新鮮な所に移していいじゃないかということには十分な理由があります。

私は、重都というのは、平時の場合、いま東京の混乱をカバーしてあげて、阪神大震災のような非常事態の場合には、東京の機能を代替しますよというものです。そうして、ときどき実験することが必要です。そうすると、新聞記者はどこに泊まるかとか、思いもかけない財〜カネと物の動きがわかったりします。人類の文化にしても、はじめは赤道直下辺りから始まったけれども、長期的にみると、徐々に北上してきて大体北緯40度以北に中心は移ってきています。ロンドン、パリをはじめモスクワもベルリンもニューヨークも北緯40度以北ですね。札幌、ミュンヘン、ミルウォーキーというキャッチフレーズは傑作ですね（笑）。

原（司） 首都機能移転ということになると、どこに首都が移転するかとか、東北地区という説もあるわけなんですけど、私は、首都機能移転よりも、日本の都市機能、あらゆる都市機能がみんな東京に集まったら、非常に問題があるんで、やはり、21世紀は、いろいろな都市機能が分散化するのではないか。ドイツなんかはまさにそういうかたちで、政治的な機能と金融的な機能と、商業的な機能と工業的な機能、みんな、それぞれの都市に分かれているわけです。フランクフルトなんか、30年経ってみても、人口はほとんど変わってないとか金融の機能しかもってませんから、あれ以上大きくなる心配はないというか、そういう展望が持たれないという意味で安

心感、安定感があるわけなんです。

そうなった場合に、ほくとう地域がどういう都市機能をもつのだということをむしろ問題にしなければいけない。私は、酪農と観光の都市機能をもつというのではちょっと寂しい。さきほど伊藤先生もおっしゃったような意味での東を向く、あるいはアメリカを向く、そこのいわば橋渡し、架け橋としての中心機能みたいなものを果たすというようなものを考えていくべきだと思う。あまりどこに首都機能が移転しようと、とにかくいまの東京一極集中ではどうにもならないということは、はっきりしているわけですから、都市機能を分散する段階で、ほくとう地域がどういう絶対的な機能を果たすかということについて、ほくとう総研と北東公庫で、そういう意味の情報を開発し提供するという役割がついてゆくことが望ましいのではないかと考えております。

新飯田 現在の東京には都市の集積からの大きな利益というのがありますから、それを移転させれば、少なくとも短期的なコスト・ベネフィット（費用便益）を計算してみると、必ずしも移転すべきであるという結論はでてこないのではないかと。ただ、首都機能移転の問題はもっと長期的な日本の将来像の観点から評価すべき問題だと思います。長期的にプラスになるか、から論ずるべきでしょう。

やはり、いまの東京に都市機能が集まりすぎている問題というのは確かですから、都市環境とその外部性まで考慮すると日本社会全体の効率を低下させてゆくという問題でしょう。そこで、首都機能の全部ないし一部を移転させる必要があるのだと思います。移転する限りは何らかのメリットをもつ所へ移るのでしょうから、もしその概念を北海道・東北が利用できる地理的環境条件を持っているのならば、それなりのキャンペーンをしたほうが良いと思います。

下河辺 そうですねえ。首都機能移転の、何か新しい心配ができて、議論を再開するということで、



心配を増幅するというのをいま政府としては一生懸命やっていて、また委員が20名ほど任命されて、議論が始まるのでしょね。

どういうふうにかえるかということで、まず第一に私が思っていることは、日本人というのは、高度成長以来、何でも考えると明日にでもできるように思う人がいて、明日にはできないからダメっていう、変な論理構造なんですね。首都なんていうのは、江戸から東京へ300年かけて今日の東京になったし、京都の町も1000年かけてあんなったわけで、これからわれわれがつくるという新しい首都は、大抵100年をかけたテーマなんです。私なんかは、500年後の日本のためにというので、みんなが呆れて冷えちゃうわけですけども、首都を考える民族というのは500年の夢を持つべきじゃないですか。10年でつくるなんて言っていますが、なんだか整っている都市がカップラーメンのようにお湯をかければできるというような発想が多すぎるので、ちょっと不愉快なんです。

それが私の基本的な考え方なんですけれども、きょうのほくとう日本というテーマでいうと、「ほくとう」はどこかっていうことが首都機能移転と絡んでちょっとしたテーマなんです。純粋に「ほくとう」という地域を議論するときに、縄文文化も含めて仙台、札幌間ということに、私はかなりこだわっ

ているんです。関東が広がっていく、福島とか新潟が果たしてほくとう地域かどうかは、少し議論があるなあっていう感じがあるわけです。

特に、世界に2つとない大東京の地域開発的な処理のテーマは、100キロ圏の首都圏政治地域内ではほとんど不可能になったんです。私は、仙台、新潟、名古屋をターミナルの国際都市とした東京として、首都圏問題をもう一度考え直す必要があるということを出しているわけですが、縄張りもあって大変なんですけどね。だけど、仙台と新潟と名古屋という国際都市が、もしオープンできれば、東京のガス抜きはとてもうまくできるはずなんです。

そういう300キロ圏東京問題の処理について、首都圏といったらいいか、そういうエリアができたとしたら、その圏内で新しい首都を探すということというのは考えやすいんです。東京都の反対なんかそのへんになると、ちょっと反対が違ってくるんです。というので、東京問題の処理と首都機能移転とは、私は連動すると思っているわけです。

そういうときに、むしろ、ほくとう地域というのは、首都の拡大地域という感じではないことまで進展するかどうかです。仙台から北海道、北方四島までのいわゆる21世紀型を考えるほうが私にとっては、頭の整理がしやすくて、東京の残務整理のエリアをちょっと譲って欲しいという気も率直にいえばしている。だけど、だんだん日本の国土全体がそういう変化の時代にきているのではないですかね。

司会 最後に総裁のほうからごあいさつをお願いします。

宍倉 お話をおうかがいしております、もっと時間があれば私も参加をしたいテーマであると思います。本日諸先生からお話をうかがいまして大変参考になりました。実際の業務に生かしていることもございますが、今後多々具体化して参る所存でございますのでよろしくご支援下さいますようお願い申し上げます。

司会 本日は、お忙しいところをありがとうございました。大変貴重な意見をいただきまして、今後の業務に大変参考になりました。また、こういう機会を持たせていただきたいと思いますので、ひとつよろしく願いいたします。

出席者プロフィール

下河辺 淳（しもこうべ・あつし）

大正12年生まれ。昭和22年東京大学第一工学部卒業後、戦災復興院技術研究所勤務。経企庁総合開発局長、国土庁計画・調整局長、国土事務次官などを歴任。平成4年東京海上研究所理事長に就任、現在に至る。東京都出身。

伊藤 善市（いとう・ぜんいち）

大正13年生まれ。昭和22年東京商科大学（現一橋大学）卒業。山形大学、東京女子大学助教授を経て昭和40年東京女子大学教授、平成2年同大学比較文化研究所所長を歴任。平成5年帝京大学教授に就任。山形県出身。

原 司郎（はら・しろう）

昭和3年生まれ。昭和27年東京大学経済学部卒業。神奈川大学教授、横浜市立大学教授を経て平成4年同大学名誉教授、高千穂商科大学教授、平成7年11月同大学学長に就任、現在に至る。神奈川県出身。

新飯田 宏（にいだ・ひろし）

昭和6年生まれ。昭和30年横浜国立大学卒業。埼玉大学、学習院大学、横浜国立大学の助教授などを経て、昭和48年横浜国立大学教授に就任。平成8年同大学名誉教授、放送大学教授に。東京都出身。

「宮沢賢治」

イーハトーブをこよなく愛した詩人



ほくとう総研 理事長 窪田 弘

宮沢賢治で私がまず思い出すのは、「はるかなる山河に」（東大学生自治会戦没学生手記編集委員会編、昭和22年）の冒頭に収録された佐々木八郎氏の手記である。佐々木氏は、昭和17年東大経済学部に入學、18年海兵団入団、20年4月14日、沖縄海上で特攻隊員として戦死された。

「宮沢賢治は、僕の最も敬愛し、思慕する詩人の一人であるが、彼の全作品の底に流れている一貫したもの、それが又僕の心を強く打たないではおかないのだ。『世界がぜんたい幸福にならない中は個人の幸福はあり得ない。』という句に集約表現される彼の理想、正しく、清く、健やかなるもの～人間としての美しさへの愛、とても一口には言いつくせない、深みのある、東洋的の香りの高い、しかも暖かみのこもったその思想、それが、いつか僕自身の中に育まれてきていた、人間や社会についての理想にぴったりあうのである。『烏（からす）の北斗七星』中に描出された彼の戦争観が、そのまま僕の現在の気持ちを現しているといえるような気がする。大尉が、『明日は戦死するのだ』と思いながら、『わたくしが、この戦いに勝つことがいいのか、やまがらすの勝つのがいいのか、それはわたくしにはわかりません。みんなあなたのお考えの通りです』と祈るところと、やまがらすを葬りながら、『ああマジェル様、どうか憎むことの出来ない敵を殺さないでいように早くこの世界がなりますように。そのためならば、わたくしのからだなどは何べん引裂かれてもかまいません。』というところに見られる『愛』と『戦』と『死』という問題についての最も美しい、ヒューマニスティックな考え方なのだ。人間として

これらの問題にあたる時、これ以上に人間らしい、美しい、崇高な方法があるだろうか。本当の意味での人間としての勇敢さ、強さが、これほどはっきりと現れている状景が他にあるだろうか。」

「勿論、僕は戦に勝つ方がいいか、負ける方がいいかを知らないとはいわない。どの民族も、どの国家も、全力を挙げてその民族、その国の発展をはかってこそ人類の歴史に進歩があるのだと思う。然しながら、果たしてわれわれが勝つか負けるか、その問題になると、早や何とも言えない。われわれ経済学徒は、戦争は何故起こらねばならないか、戦争の勝敗の鍵は何か。そういった問題を研究し、それが生産力～国家の総力の具体的表現とも言うべき、国民経済生産関係の有する生産力であることを知るとともに、又個々人の理想主義的努力を超えた、運命的、必然的な力のあることを知ったのである。もはや、われわれの努力が直ちに、わが国の勝利と東亜諸民族の解放とを約束すると信じることもできない。われわれの期待できるのは、一国民としての立場を超えた世界史的観点において、われわれの努力は、世界史の発展を約束するであろうという事のみである。日本人としての主張にのみ徹するならば、われわれは敵米英を憎みつくさねばならないだろう。しかし、僕の気持ちはもっとヒューマニスティックなもの、宮沢賢治の『烏』と同じようなものなのだ。憎まないでも良いものを憎みたくない。そんな気持ちなのだ。」

「では、何の為に今僕は、海鷲を志願するのか。この世に生まれた一人の人間として、偶然置かれたこの日本の土地、この父母、そして今迄に受けて来

た学問と、鍛えあげた体とを、一人の学生として、それらの事情を運命として担う人間としての職務をつくしたい。全力を捧げて人間としての一生をその運命の命ずるままに送りたい。」

「世界が正しく、良くなる為に、一つの石を積み重ねるのである。なるべく大きく据わりのいい石を、先人の積んだ塔の上に重ねたいものだ。不安定な石を置いて、後から積んだ人も諸共に倒し落とすような石でありたくないものだと思う。出来ることなら我等の祖国が、新しい世界史に於ける主体的役割を担ってくれるといいと思う。然し現在のわが国の国内態勢にはまだまだ旧いものが、振るい落とされずに残って何か心許ないものを感じさせられる。頑張り抜こうという精神ばかりでは駄目だ。その精神の担う組織、生産関係を、科学の命ずるところによって最も合理的にすることこそ必要なのではなかろうか。われわれは、われわれに決まったように力一杯働くのみ、それ以上を望むことは、神を冒瀆するものというべきであろう。」(引用終わり)



今年(1996年)は、宮沢賢治生誕100年で、色々な記念行事や研究出版等が行われている。正直言って、私には、宮沢賢治はよく分からない存在だった。宇宙的な広がりをもった幻想的な話、花巻の方言、変わった擬音や比喩、動物や自然現象との対話、外国人のような変な名前、化学物理用語を駆使した詩等々、こんな「童話」が面白いという子供は、もしいるならば、よほど変わった子供ではないか、などと考えたりもした。

それが、この宮沢賢治ブームで出版された数多くの本の中から、たまたま目についた、宗左近著「宮沢賢治の謎」(新潮選書)と、吉本隆明著「宮沢賢治」(ちくま学芸文庫)を読んでから私の認識は一変した。

宗左近氏は、「賢治には、西欧的教養人を喜ばせないところがある」と言う。宗氏は、賢治の文学の一つの特色が「現場にいて現場を離れない発語ということ。現場という直接性がひどく強くて、それがきらめく光を投げかけていて、そのために、ある〈わからなさ〉のようなものが出てくる」。活字を通して読んで世界を知ったつもりになる、現実という

ものを、極端に言うとはひとつ知らない人間、つまり明治初年以降の知識人、学校教育を受けた人のような「観念人間」を、すぐ感動させる力を賢治の作品は持たなかった、あるいは、賢治はわざとおし隠していた、とも言えると述べている。宗氏は、昭和20年5月25日の夜に、アメリカのB29の大編隊によって出現した東京の火の海の中に、母親と二人で逃げまどったが、その海の中から出てきたのは宗氏だけだった。「それはいったいどういうことなのか、そのわたしの体験の中にもう一回戻りながら、また逃げ出しながら、ふと、自分に伴走してくれる存在を、かすかながらも感じはじめていました。その一人が賢治だったのです。」

そして、賢治が妹の死を契機につくった「無声慟哭」から読み始める。わからないところ、謎を自問自答しながら。宗氏の文章を読んでも、賢治の詩が、或いは童話が、「わかった」とは言えないが、何か感動的な、新しい広い世界が開けてくるのを感じるのである。賢治自身も言っている。

「これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。」

(『注文の多い料理店』序)



賢治の人生の出発点に於ける曲がり角になる出来事をたどってみる。

大正3年(1914年)盛岡中学校卒業。島地大等編著「漢和対照妙法蓮華経」を読み、強い感動を受ける。

大正4年(1915年)家業(祖父のはじめた質・古着商)の嫌悪と進学の念強く、盛岡高等農林学校第二部(農芸化学科)に首席入学。寮の部屋から法華経をあげる賢治の力強い声が毎朝流れたという。

大正7年～8年(1918～1919年)、信仰問題につき、父と談合、書簡の往復。浄土真宗の熱心な信徒であった父と信仰上の対立。家業の店番をしながら「暗い生活」を送る。

大正9年(1920年)日蓮竜の口法難の日に、恐ろしさや恥ずかしさにふるえながら燃えるばかりの喜びで、花巻町内を唱題して歩く。国柱会に入会し御曼陀羅を受ける。父もこれを許す。信仰いよいよ厚く、町内を寒修行し、法華経の輪読会をつづける。

大正10年(1921年)たまたま店番中日蓮遺文集が棚から落ちて背を打ち、突如家出を決行する。25歳。

家出した後も、自分の生活、職業、家のこと、妹の将来等こまごまと父親に書き送っている。しかし、信仰問題については、家の宗教を日蓮による法華経信仰に改めない限りは帰郷するつもりはないという。信仰を除けば、申し分なく物わがりの良い親と子なのだが。

それは、日蓮の教えによることなのだ。日蓮は、『開目抄』で述べている。外典三千余巻は煎じ詰めると、孝と忠に帰する。仏法を修行しようとするものが、知恩や報恩を实践することがなくて良いはずがない。父母の家を出て出家の身となるのは、必ず父母を救おうがためだ。父母を「永エニ成仏セズ」の道に入れてしまうのは、不知恩の者になったということだ。「もともと父と子の確執や対立の問題とはなりえないはずの宗教の違いが、父と子のあいだの生涯を左右する大問題になる。家業とからめて、奇怪ともいえるほど生涯のコースを混濁させている。これが宮沢賢治の自伝のかなめだった。そしてそれを統御したのは『開目抄』の理念だとみられる。」(吉本隆明、前掲書)

信仰の問題は、死後の世界を書いたような童話「銀河鉄道の夜」にも出てくる。

「さっきまでカムパネルラの座っていた座に黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人がやさしくわらって大きな一冊の本をもっていました。『おまえのともだちがどこかへ行ったのだから。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行ったのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ。……おまえはあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしてみんなと一しょに早くそこに行くがいい。そこでばかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。』
『ああぼくはきっとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいいでしょう。』

『ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえの切符をしっかりとっておいで。そして一しんに勉強しなきゃいけない。おまえは化学をならったろう。水は酸素と水素からできているということを知っている。いまはだれだってそれを疑やしない。実験してみるとほうんとうにそうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできていると言ったり、水銀と硫黄でできていると言ったりいろいろ議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう。けれどもお互いほかの神さまを信じる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれどももし、おまえがほんとうに勉強して、実験でちゃんとほんとうの考えと、うその考えを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じようになる。けれども、ね、ちょっとこの本をごらん。いいかい。これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこのページはね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。紀元前二千二百年のころにみんなが考えていた地理と歴史というものが書いてある。そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいていほんとうだ。さがすと証拠もぞくぞく出ている。けれどもそれが少しどうかなと、こう考えだしてごらん、そら、それは次のページだよ。紀元前一千年。だいたい地理も歴史も変わってるだろう。このときにはこうなのだ。ぼくたちは、ぼくたちのからだだって考えだって、天の川だって汽車だって歴史だって、ただそう感じているのなんだから。』

これはなかなか重大な思想を含んでいると思う。賢治は、死ぬまで法華経の信仰を捨てていないが、ここでも法華経こそが長い時間の試練を経た真理だということを当然の前提にしているのだろうか、あるいは、銀河鉄道の夜の第一稿を書いた大正13年(1924年)、28歳のころには、より広い世界観に立つようになっていたのだろうか。わたしにとって謎である。

●思うままにつれづれ…

車屋の視点

新潟三菱自動車販売株
代表取締役

与田 一憲



RVといわれる車の全乗用車に占める割合が30%を超えたそうで、10年ほど前までは「商用のバンみたいでイヤだ」といわれていたのを見るとホントに様変わりです。価格もふつうのセダンより割高なのですが、思えば車も洋服のように「着るものとして」見る時期になったのかもしれない。

例えば、フォーマリティであり、ビジネスであったスーツが1週間の内、5日間着る服となり、つまり普段着になってしまったと同じように、個性的なものを表現する「ハレ」の場合はアノニムなセダンから、より自由度の高いカジュアルの方にシフトしつつあるようです。そして、それでもスーツにこだわる人がアルマーニやランバンといった具合に、ブランドで差別化をするのと、メルセデス/BMWやセルシオといった、高級セダンが強い事には共通点があるのでしょうか。

勿論、普段着としてのスーツの需要は大きいわけで、前述のトップクラスの下には、三越/高島屋からイトーヨーカ堂/青山まで、各人がそれぞれ自分のランクを設定して購買行動をしています。が、普段着であるが故に価格優先であり、これが、シングルかダブルかといった「スーツとしての範囲」での差では、価格ランクを移動させる動機にはなりません。ところが、これがカジュアルになった途端、おとうさんは娘に薦められて魔がさしたように「ハレ着」のラルフ・ローレンのジャケットを買ってしまうのです。

さて、話がややこしくなるのはこれからです。RVであるからにはリゾートしなくてはなりません。リゾートといえば今流行りのアウトドア。そこでコールマンのランタンやグリルをホームセンターで揃え、ノースフェイスのシャツにコロンビアのベスト、ダナーの靴もバーゲンで買い、CWニコルの本まで読んで準備は万端、週末に三セクの作ったリゾートへ渋滞をものともせず1泊2日、……と、RVからリゾートまで、「名前」は延々と並び「形」は整います。

フローの文明として世界に冠たる日本の典型的な記号消費は、ファッションには成り得ても、ライフスタイルにはなりません。

判断停止を強制する受験用知識偏重教育と、同じく、価値観のかぎりなき一元化をめざすモーニングショーで「名前」を覚え、円高に支えられた所得が「形」を保証してくれるので「中の上」となるわけですが、中味は記号の羅列による書割り生活で、正に情報化社会を実践している人類最前線と申せましょう。いそいで云っておきますが、決してそれらが不満だという事ではありません。なんととっても、RVは売れますし、地球上の大部分から見れば、天国のような生活をしている一握りの集団に紛れ込んでいるのですから。

ただ、出来れば、国なり地域なりで舵取りをしていただいている行政や研究機関までが、リゾートやインテリジェントというような「名前」、開発や平等という「形」を紡ぎ出すのを多少控えていただき、仕組み、制度或いはシステムといった方向の検討に進んでもらえば、教育は教養になり、所得は財産に変わり、フェリーボートにフェリートレインでも加われば、渋滞も減って、チョット余裕が出てくるんじゃないでしょうか。

書割り文化は、その純粋な結晶体ともいえるナントカ村を全国に撒き散らしながら、日本の固有文化を擦り潰しつつ、国が親切にも用意してくれた国土軸というコリダーを伝って刻々と東北に迫っています。

我らが安住の地！ 日本文化の防波堤！！
旧人類の故郷！！ 世界の酸素ボンベ！！！！
東北を守ろう！！！！

……多少、興奮してしまい失礼しました。では、無駄話はこれくらいにして、RVを拡販しなければなりませんし、週末には最近出来て評判の「柏崎トルコ村」にも行ってみたいと思っています。

皆様もよい週末を。

夏の観光王国のイメージチェンジ作戦

“ニュースポーツ・雪合戦”で まちおこし——北海道壮瞥町

ほくとう総研 専務理事
高田 喜義

1. 昭和新山と観光の町の課題は通年観光

壮瞥町は、北海道の南西部に位置する「支笏洞爺国立公園」内にあり、町の面積（203平方キロメートル）の85%が森林や湖で占められ、西は洞爺湖に接し、町内に昭和新山や壮瞥温泉をはじめ多くの温泉を有する道内屈指の観光地である。

主要産業は、洞爺湖、昭和新山に基盤を置く観光産業と町の中央を流れる長流川流域の肥沃な農耕地による果実や高級菜豆、野菜等の農業である。人口は昭和50年代に4,500人を数えたが平成7年には3,500人に減少している。

平均気温は8月が摂氏21.3度だが、冬季の1月にはマイナス5度に低下し、積雪も平野部で50cm、山間部で150cmを越える。このため、年間250万人を越える観光客の80%は4～9月の上半期に集中し、厳冬期には皆無に近い状況で、この期間の観光客の増加が地域経済の安定、通年雇用確保の上からも地域にとって大きな課題となっている。

2. 東南アジアの人のくれた「雪合戦」のアイデア

このような中で利雪、親雪の意識が高まり、雪や寒さを逆手にとったイベントを冬季に実施することにより冬季の滞在観光客の増加を実現し、地域の活性化を考えようとする気運が盛り上がり昭和62年8月、観光・商業・農業・公務員等各界の若者達が集まってアイデア検討グループが結成され、連日深夜にわたる会合がもたれた。



数々のアイデアが検討されるなかで、冬に北海道を訪れる東南アジアの人々が初めて見る雪に感激し、雪の感触を確かめるように真っ先に雪玉を作り嬉々としてぶつけあう行動が話題になった。

これがヒントとなって、資源として身近な雪の価値を見直し、昔皆が遊んだ雪合戦を現代風にアレンジしてニュースポーツとして再



編した新しいイベントを創り上げることとなった。

3. ニュースポーツ「雪合戦」の誕生

アイデア検討グループの1年におよぶ議論を経て、昭和63年7月「昭和新山国際雪合戦フェスティバル実行委員会」が結成された。この実行委員会は、従来のイベントのそれが観光事業の場合は観光業者が、物産の場合は農業者が中心となって結成されたのとは異なり、全町的、しかも職業、業種の枠を越えたもので、個人、団体等老若男女約400名がボランティアとして参加した。

実行委員会は、手始めに「ルール制定委員会」を設けて雪合戦のルールづくりをはじめ、世界初の「国際雪合戦競技規則集（ルールブック）」が世に出ることとなった。

かくして平成元年2月「第1回昭和新山雪合戦」が2日間にわたって開催された。

実行委員会の周到な準備と宣伝が実って道内外から70チーム約7000人の来場者が集まった。

お年寄りも公民館で豚汁づくりに精をだし、商工会青年部は重機やトラックを会場に持ち込んでコートづくりに汗を流し、若いスタッフも会場を設営し、開会式を演出、審判も努める奮闘ぶり、普段あまり交流する機会のない地域、業種の町民がこうした共同作業を通して交流が深まり、町民の一体感の醸成が実感されていった。

4. 国内外に広がる雪合戦交流の輪

① 年々拡大する大会

平成元年を第1回とする国際雪合戦も今年で第8回を迎えたが、人気が高まるにつれて参加チームが増え、本大会では消化しきれなくなり、道内で予選

会が開かれるようになった。

第8回目の今年は、予選会参加約600チーム、本大会参加チーム189チームを数えている。

大会別参加数

	チーム	参加人員	開催日
第1回	70	7,000	平成元年 2/25, 26
第2回	81	10,000	2年 2/24, 25
第3回	171	16,000	3年 2/23, 24
第4回	150	17,000	4年 2/22, 23
第5回	169	17,000	5年 2/27, 28
第6回	198	19,000	6年 2/26, 27
第7回	188	20,000	7年 2/25, 26
第8回	189	22,000	8年 2/24, 25

この参加チームの中には道外13都府県からの17チームが参加している。

また、雪合戦は女性に人気があり、3回大会から女性の部を設けたが今年の8回大会では33チームが参加した。

海外からはフィンランド等が単独チームで参加したのをはじめ、10ヵ国8チームが参加した。

また、これまでにカナダ、アメリカ、ニュージーランド、タイ、韓国等多数の在日外国人がチームをつくって参加している。

② 雪合戦用具の開発とルールの制定

相手に雪玉をぶつけるという競技の特性と安全性確保の観点から北大低温研究所や国立病院のアドバイスと協力をえて、安全な雪玉の製造器や雪玉製造ハウス、雪玉ケースの開発、スポーツ用具としての競技用、審判用専用ヘルメットの開発等を行っている。

また、当初のルール制定委員会を発展的に解消し、全国から11名のルール委員を選定し、完成度の高いルールの策定を図るとともにルール解説ビデオ、英語のルールブックを作成している。

③ 雪合戦連盟の結成と国内外への普及

平成5年2月に雪合戦の普及とルール統一を目指して国内のネットワークをつくるため、「日本雪合戦連盟」「北海道雪合戦連盟」を結成した。日本連盟には北海道、青森県、富山県など1道5県が加盟している。連盟では会報を発行して雪合戦情報を提供し雪合戦の普及に努めている。

雪合戦が盛んになるにつれて全国各地で大会が開催されるようになり、町民スタッフが講師として、道内はもとより青森県、岩手県、山形県、群馬県、長野県、静岡県、富山県、鳥取県、広島県、香川県等に出向いている。また、海外ではオーストラリアやフィンランドにも要請を受けて講師を派遣したほ



か第6回大会には韓国から視察団が来場したり、ロシア、ハバロフスク地方にもビデオによる情報提供を行った。

④ 大会費用は、約3,000万円だが町からの補助金800万円を中心に労働省、道観光連盟等の補助金950万円、企業からの賛助金等により賅われている。

5. 活動の意義・効果

「スポーツ雪合戦」の開発、普及を通して国内・海外との交流がすすみ、一般旅行者にも“雪合戦の昭和神山”のイメージが広がりつつあるとともに海外における“SYOWASINZAN”の知名度がアップしている。

雪合戦というイベントを町民が協力して実施することにより町民間に地域づくりへの一体感が醸成され、地区、世代を越えた交流が進展するとともに新しいスポーツを開発し普及させたという自信と誇りを町民が持つようになった。

また、雪合戦を契機に海外との交流が始まり、平成7年度から町内の中学3年生全員（約40名）をフィンランドに派遣しホームステイさせる等町民レベルの国際化が進展している。

経済面では大会期間中は地元壮瞥町はもちろん隣の洞爺湖の宿泊設備も満員になるほか飲食、おみやげ、交通などに効果が上がっている。

6. 今後の課題と展望

やっかいものの雪を活用するイベント「スポーツ雪合戦」のコンセプトは、いつでも誰でもできるスポーツとして普及し始めており、発祥の地昭和神山はそのメッカとなっている。

しかし、当初目的とした通年観光の実現にはまだほど遠いのが現状である。この雪合戦効果をどう広げていくかが地域の課題であろう。

なにはともあれ21世紀にはこの壮瞥町で生まれた雪合戦がオリンピック種目として晴れ舞台に登場することを期待したい。

事務局から

96地域シンポジウム開催のお知らせ

北東公庫・ほくとう総研共催で「北東公庫創立40周年記念地域シンポジウム」を開催致しますので、是非ご参加下さい。何れも参加費は無料です。

1. 札幌会場

テーマ～ 「北海道の産業戦略を考える～自立的経済発表をめざして～」
出演者～ 基調講演 **堤 富男** (前通産事務次官)
 パネラー **矢田 俊文** (九州大学経済学部教授)
 正木 宏生 (㈱ダイナックス社長)
 濱田 康行 (北海道大学経済学部教授)
開催日～ 1996年11月14日(木) 13:00～15:30
開催場所～ ホテルニューオータニ札幌

2. 仙台会場

テーマ～ 「2050年の東北～子孫たちに、何を残せるか？」
出演者～ 基調講演 **木村尚三郎** (東京大学名誉教授)
 パネラー **杉山 陸子** (㈱企画集団ぶりずむ代表)
 水戸部知巳 (東北経済連合会副会長)
 相沢雄一郎 (河北新報社常務)
 多田 克彦 (㈱六角牛農場社長)
開催日～ 1996年11月29日(金) 13:30～16:30
開催場所～ 仙台国際センター

訃 報

当財団の理事を務められておりました小森英夫同和鉱業(株)相談役が9月9日午前7時33分、急性心不全により逝去いたしました。小森理事には当財団設立以来、多大なご尽力をいただきました。衷心よりご冥福をお祈りいたしますと共に、紙面を借りまして、ここに謹んでご通知申し上げます。

◆本誌へのご意見、ご要望、ご寄稿をお待ちしております

本誌に関するお問い合わせ、ご意見ご要望がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせ下さい。
また、ご寄稿も歓迎いたします。内容は地域経済社会に関するテーマであれば、何でも結構です。詳細につきましてはお問い合わせ下さい。(採用の場合、当財団の規定に基づき薄謝進呈)。

〒100 東京都千代田区大手町1-9-3公庫ビル
ほくとう総研総務部 NETT編集部 宛
TEL.03-3242-1185(代) FAX.03-3242-1996

HOKUTOU DIARY

平成8年7月～9月

★ほくとう総研のおもな出来事、活動内容についてご紹介します。

- 平成8年8月1日 当財団懇話会開催
8月31日 地域指標ハンドブック（1996年版）発行
9月4～5日 地域政策研究会開催（東室蘭市）
9月25日 NETT16号発行

編集後記

この夏の話は「アトランタオリンピック」、「O(オー)157」、「薬害エイズ」など……。中でもO157は、外食産業、生鮮食品の卸小売業などにかかなりのダメージを与え、日本列島を震撼させるものとなりました。何と言っても、原因が特定できない点が、危機感を募らせたようです。うまいものを食べ、思いっきりレジャーに興ずるという便利な世の中になりましたが、ここに得体の知れない「ちん入者」がいること、落とし穴があることも忘れてはなりません。これからも、こうした不可解な事件が決して増えないことを願っております。(TW)

好評発売中!

〈地域指標ハンドブック1996版〉

ほくとう総研・北東公庫共編 発行 ほくとう総研
ほくとう地域における経済・生活・文化等に関する基礎データを始め、地域開発の歴史・関連法律、テクポリ・リゾート法関連に至るまで各種データが満載されております。地域開発に携わっておられる方、地域に立地されておられる企業の方々に必携の書といえます。是非ご覧下さい。

定価1,500円（送料別）

〈地域づくりと第三セクター〉

著者 ほくとう総研専務理事高田喜義 発行 株ぎょうせい
本書は1. 戦後の地域開発の流れ、2. 自立的地域づくり、3. 自立的地域と第三セクター、の3章からなっており、特に①自立的地域づくりの方策、②豊富な事例による第三セクターの経営のノウハウ、③第三セクターの設立から経営までの失敗しないためのポイントを詳述しているのが特色です。

各種会議用、研修用あるいは説明会等の場において、または業務の参考用にご活用されることをお奨めいたします。

定価1,800円（送料別）

（何れも購入ご希望の方は当編集部までお問合せ下さい。）



財団法人 北海道東北地域経済総合研究所機関誌

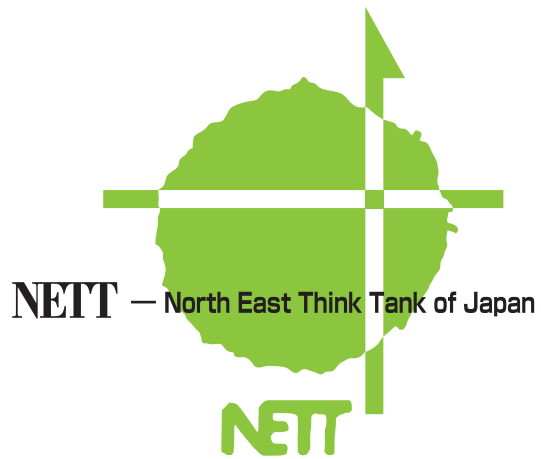
NETT

No.16 1996.9

編集・発行人◆伊井 孝義
発行

(財)北海道東北地域経済総合研究所
〒100 東京都千代田区大手町1-9-3
TEL.03-3242-1185 FAX.03-3242-1996

禁無断転載



財団法人 北海道東北地域経済総合研究所

〒100 東京都千代田区大手町1丁目9番3号(公庫ビル5F)
TEL.03-3242-1185(代) FAX.03-3242-1996